

## 石と他者：オブジェクト指向存在論の倫理学

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程：中間 統彦

近年、文学理論や社会学などの分野で、深刻化する環境問題などへの意識から「人新世 (Anthropocene)」という語への注目が高まる一方で、人工知能に代表されるテクノロジーの発達に伴って、哲学や倫理学でも、人間という枠組みを超えた新たな領域の探究が盛んになってきている。21世紀における「思弁的实在論 (Speculative Realism)」ないし「新しい唯物論 (New Materialism)」の登場は、現代的な問題意識の優れた例のひとつである。本発表の目的は、このような思想的潮流に位置づけられるグレアム・ハーマンの「オブジェクト指向存在論 (Object-Oriented Ontology)」を検討することで、石や機械などの非生命的なモノと倫理学との関係を明らかにすることにある。

現時点において、オブジェクト指向存在論と倫理学の関係性は、決して自明ではない。オブジェクト指向存在論の主眼は、あくまでもフッサールやハイデガーといった現象学者の批判的継承を通じて、モノの世界を含めた新たな存在論を構築することであり、倫理学との関係性が前景化することは少ない。事実、ハーマンは論文「第一哲学としての美学 (Graham Harman, "Aesthetics as First Philosophy: Levinas and the Non-Human," in *Naked Punch*, Issue 9, pp.21-30, 2007)」において、倫理学を第一哲学とするレヴィナスに対して批判を行っており、その批判は、あたかもオブジェクト指向存在論が、倫理学と反目するかのような印象を与える。しかし、その一方で、ハーマンは『ダンテの壊れたハンマー』(Graham Harman, *Dante's Broken Hammer*, Repeater, 2016)において、ダンテとカントを対比させながら、オブジェクト指向存在論が目指すべき倫理学の在り方について、新たな思索を展開している。本発表では、美学を「第一哲学」と見做すオブジェクト指向存在論にとって、倫理学はどのような地位を占めるのか、そして、現代の倫理学に対して、ハーマンの主張はどのような寄与を果たすことができるのかを分析する。

具体的には次のように発表を行う。まず、ハーマンのオブジェクト指向存在論の内実を我々の問題関心に必要な限りで明らかにした上で、『ダンテの壊れたハンマー』を中心としたハーマンの倫理学の試みを素描する。ハーマンは、シェラーやリングスを参照しつつ、カント的形式主義を別の仕方で解釈しており、本稿はその点に注目する。最後に、「上方埋込 (overmining)」、「下方埋込 (undermining)」という概念の検討を通じて、倫理的な還元主義に対するハーマンの批判を汲み取りつつ、オブジェクト指向存在論が現代の倫理学に与えるインパクトとは、どのようなものなのかを我々なりの仕方で位置づける。